

# 子ども図画・作文・習字展

「図画・作文・習字」で、市長賞を受賞した方と作品をご紹介します。

なお、掲載した作文は表彰式で朗読されたものです。

## 図画

### 平成19年度市長賞受賞作品



「グッピーとお兄ちゃんとぼく」

東小2年

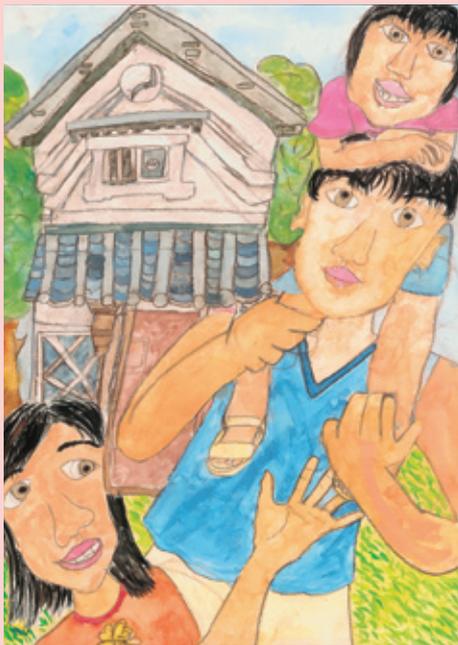
齋藤颯汰さん



「まつり」

真鍋小1年

葛西海都さん



「八郷に行ったよ」

神立小4年

三輪祥子さん



「かぶと虫がとれたよ」

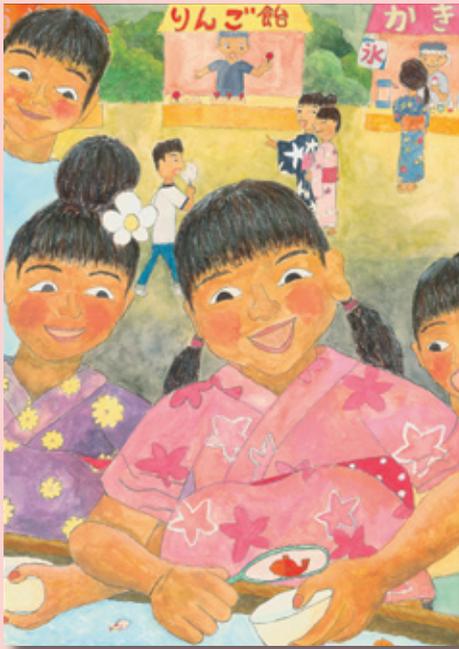
土浦小3年

皆川有成さん

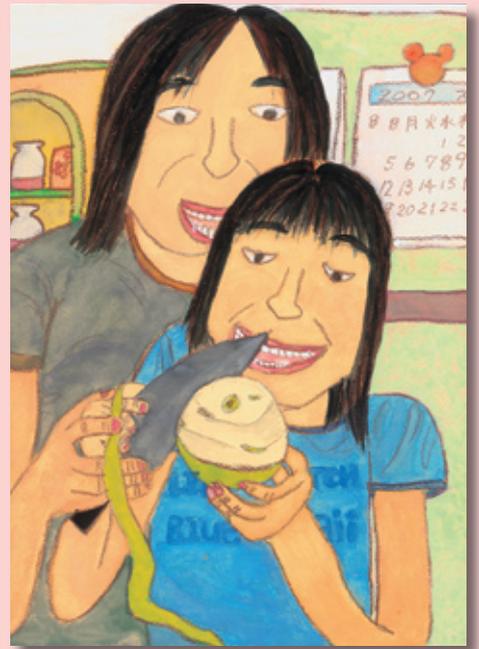




「金魚すくい」  
東小6年  
山本夢佳さん



「なしの皮むきに  
チャレンジ!」  
土浦小5年  
皆川有芽さん



「練習中!!」  
土浦一中1年  
杉山佑希さん



「親子で水まき」  
新治中2年  
木村汐里さん



「夕涼み」  
土浦五中3年  
古内麻美さん

# 作文



「ぶじに育った  
ハト」

荒川沖小3年  
田中 匠さん



「地球を守るために  
できること」

乙戸小4年  
市川裕理奈さん



「お父さんの入院で  
分かったこと」

菅谷小5年  
菅原 綾さん



「ばあちゃんの畑」

下高津小6年  
櫻井理樹さん



「祭り見学で  
感じたこと」

土浦五中1年  
濱田志保さん



「モンゴルから  
ウラがやって来た」

土浦五中2年  
浅野恭代さん

## はじめてのじてん車

東小2年 中村由菜ゆいなさん



なつ休み前、わたしはじてん車にのれませんでした。いつもお母さんと車で行くので、じてん車にのれなくてもへい気でした。

よる、かぞくでごはんを食べている時、お父さんが、「ゆいなのは、じてん車にのれるのか。」と聞きました。わたしは、「ぜんぜんのれないよ。」と言いました。そしたらお父さんが、「早くのれるようにならないと、のれなくなるぞ。」と、わらいました。わたしは、ちよつとくやしくなって、あしたからじてん車のれんしゅうをしようと思いました。

つぎの日からお母さんに手つだつてもらって、じてん車のれんしゅうをはじめました。

ほじよをとつたじてん車は、ぐらぐらして、わたしは足をじめんからはなせませんでした。お母さんが、うしろをおさえてくれて、「だいじょうぶだから、ペダルをふんでごらん。」といわれ、とてもこわかったけど、ペダルをふみました。

「こわいからぜつたいに、はなさないでね。」と、わたしはお母さんにいって、力いっばいこぎました。でも少し走ると、体がななめになってきて、こわくて足がついてしまいます。なん回も、なん回もれんしゅうしたけど、その日は、一人でのれませ

んでした。

おともだちは、みんなじょうずにのっているのに、わたしはのれなくてかなしくなりました。お母さんが、「たくさんれんしゅうすれば、ぜつたいのれるようになるからだいじょうぶ。」と、いってくれました。

よるお父さんが帰ってきてからじてん車にのれなかったことを話すと、「まつすぐ前を見て、のれる、のれるって、おまじないをかけてごらん。」と言いました。

つぎの日、お父さんの言ったことを思いだして、「のれる、のれる。」と言ってから前をむいて、一人でペダルをふんでみました。少しだけ足をはなして、前にすすめました。そのままれんしゅうして、六回ペダルをこぐことができました。

風がふわつとして、気もちがよかったです。いつもれんしゅうしているにわが、ちがつてみえました。たおれるかもしれないと思うとちよつぴりこわかったです。

これからも、もっともつとれんしゅうして、いろいろなところにてん車で行きたいです。

(原文のまま)



# おにぎり

土浦一中3年

内野 茜<sup>あかね</sup>



私の祖父の家では、稲作を行っている。毎年おいしい米をもらっている。米を買ったことがない。小さい頃は、五月の連休に、いとこ達とよく手伝いにいっていた。最初のうちは真面目にやっていたが、だんだん飽きてくる。田植えの姿勢が辛くて腰が痛くなってくるのだ。そうなると、大人に仕事は全て任せて、いとこや妹と、虫やかえるを見ついたり、追いかけて遊んだりして遊んだ。新緑が美しく、とても気持ち良かったのを覚えている。手伝いにきているというのを忘れて夢中になって遊んでいた。暖かい季節で、小さな新しいのちをたくさん見つけた気もする。かえるや、おたまじやくし、バッタなど、地面をちよつと見ると、たくさん生き物がいた。私は見たことがないが、へびもいるようだ。自然がいっぱい、空気もきれいで生き物たちも住みやすそうだ。

思いっきり遊ぶと、やっぱりお腹が空いてくる。一番楽しいな昼食の時間だ。草の上にシートを敷き、みんなでいっしょに食べる。おばが塩のみで作った梅干しの入ったおにぎりを食べた。外で、みんなそろって食べるおにぎりの味は格別だ。この梅干しはものすごくしょっぱくてすっぱい。おばが言うには、これが本物の味だそうだ。初めて食べたならみんな驚くだろう。ところが、このすっぱい梅干しがおにぎりにぴったりなのだ。うちのおにぎりは他のところ

のものより大きく、私は心の中で爆弾おにぎりと呼んでいる。でも、梅干しがすっぱいので、すぐにペロリと食べられてしまう。なんとも絶妙なバランスだ。それから、きゅうりの漬けものをまるかじりする。これももちろん自家製だ。きゅうりは庭の畑に なっている。うちにも小さな畑がほしい。

さわやかな初夏の風の音楽に合わせて、苗がダンスしているように見えた。小さかった私には子守唄のようなものだった。風が吹くと一斉に新緑の草花たちが踊り始める。

周囲の草花と共に、すすくと稲たちが育っていく。そして、実りの秋、丹精込めて作った米の収穫の時期を迎える。緑色から黄金色に変わり、冷たい風が田に吹いてくる。

稲刈りの時、祖父の作る米がおいしい理由を見つけた。刈り取った稲を三角形に組んだ木に逆さまにしてかけておき、自然乾燥させる。手間はかかるが、この昔ながらの方法が米をおいしくするらしい。祖父が言うには、「オダガケ」ということだ。

今は機械で乾燥させるが、この方法を使った方が米はおいしくなるようだ。やっぱり手間ひまを惜しむと味が落ちるみたいだ。

昔ながらの本当に良い方法を守った方がいいと思った。

時々、ふとあの風景とおにぎりを思い出し食べたくなる。小さい頃に見た風景とおにぎりの味は、大切なものであり、絶対に忘れられないものなのだ。普段、何気なく当たり前にご飯を食べていたけど、祖父が大切に愛情を込めて育てた米、だということとを忘れていた。米を作るのには非常に時間と手間がかかる。祖父やおばや母、作った人が、どのような気持ちで作ったか、考えて食べなくてはならないと思った。そして、作った人や自然に、感謝の心を持って食事をしようと反省した。私が食べるまでに、

たくさん人の協力があつて、食卓まで届くということを感じた。忙しくて、適当に食事をしていたが、たまにはゆつくりと、ごはんを味わって食べるのもいいことだと思う。

今、日本はスピードを求める社会となっている。食というものにも関心がなくなってきた。だからこそゆつくり食事するのが重要なのではないだろうか。つかれている時に、家族や友人と一緒においしいものを食べると幸せな気分になる。誰かと食べることで安心したり、ほっとできると思う。食べものには、人を元気づける魔法がかかっていると思う。食事は、ただ栄養を摂るだけのものではない。

これから、必ず家族で食事をする機会が少なくなってくる。だから一回一回の食事、人々とのふれあいをもっと大事にしていきたいと思う。

これから、私は確実に、少しずつだが、大人になっていく。

母や、おばに絶対負けないおいしいおにぎりを作れるようになりたい。

(原文のまま)



# 習字



都和小6年  
牧野千明さん

都和小六年 牧野千明  
一家庭



新治中1年  
来田未佐子さん

新治中一年 来田未佐子  
活気ある街



土浦第二小3年  
清水光太郎さん

土浦示三年 清水光太郎  
山川



土浦六中2年  
岡井美樹さん

土浦六中二年 岡井美樹  
土浦の文化財



土浦第二小4年  
三橋千尋さん

土浦二小四年 三橋千尋  
助け合い



土浦六中3年  
岡井咲樹さん

土浦六中三年 岡井咲樹  
山紫水明の里



右粕小5年  
渡邊詩乃さん

右粕小五年 渡辺詩乃  
花火大会